
序 肉と命をつなぐために

シンジルト

二〇〇九年に出版された絵本『いのちをいただく』は、日本国内で広く読まれ、多くの感動を呼んだ。二〇一一年には紙芝居化され、販売部数は一〇万部を突破した。さらに、二〇一三年にはデジタル版および新版も発行され、ロングセラーとなっている（内田他二〇〇九・二〇一〇・二〇一三、坂本他二〇一三）。

この絵本は九州熊本の食肉センターで働く坂本氏の実体験に基づくものである。坂本氏の仕事は牛を殺して肉にすることだったが、彼自身はこの仕事が好きではなかった。特に、殺される牛と目が合うたびに自分の仕事嫌になり、やめようと考えたこともあったという。彼の小学生の息子も父の仕事は格好悪いと思い、人前で父の仕事のことを話すのを嫌がっていた。授業参観で、父の仕事について担任の先生に尋ねられた時に、息子は「普通の肉屋です」と答えた。しかし先生に「坂本、おまえのお父さんが仕事ばせんと、先生も、坂本も、校長先生も、会社の社長さんも肉ば食べれんとぞ。すこか仕事ぞ」と言われ、彼はそれまでの考え方を変えた。息子からの理解もあって、坂本氏も仕事に自信を持つようになる。

ある日、食肉センターに一頭の牛が持ち込まれた。一人の女の子が付き添ってきていた。女の子はその牛に「みいちゃん、ごめんね……」と謝っていた。女の子の祖父によると、みいちゃんは孫娘と一緒に育ったので、ずっと家に置いておくつもりだった。祖父は、孫娘にクリスマスプレゼントを買ってあげることも、お年玉をあげることもできないことに困っていた。この話を聞いた坂本氏は、みいちゃんを屠^{はぶ}ることを拒み、会社を休むことにしたという。

翌朝、「お父さん、やっぱりお父さんがしてやった方がよかよ。心の無か人がしたら、牛が苦しむけん。お父さんがしてやんなつせ」という息子からの励ましの言葉を受けて、坂本氏は会社に向かう決意を固めた。「みいちゃん、ごめんよう。みいちゃんが肉にならんと、みんなが困るけん。ごめんよう……」と話しながら坂本氏はみいちゃんを屠り、解体した。翌日、女の子の祖父がセンターにやってきた。みいちゃんの肉を少しもらって家族全員で美味しくいただいた。「坂本さん、ありがとうございました」と感謝の言葉を述べた。

以上がこの絵本の粗筋である。この絵本がロングセラーになった理由は、肉を食べることを考えるという点で、熊本というローカルな文脈を越えて、日本全国で幅広い読者層の関心を集めたことにあるだろう。食卓の向こう側には何か、という問いを多くの人が共有していたのである。その問いに対してこの絵本は答えを出したのではない。食卓の向こう側にはみいちゃんという命がある。分断された命と肉のつながりを再確認させてくれたという意味で、この絵本の持つインパクトは大きい。

しかし、考えてみると、なぜ、当然のことしか言っていない絵本が、これほど広く受け入れられたのだろうか。筆者はモンゴル人で「肉食文化」の中で育った。筆者が日本に来て最も驚いたことの一つは、日本では季節を問わず一年三六五日いつでも肉が食べられることであった。肉は基本的に寒い季節のご馳走という認識しか持っていなかった筆者にとって、季節の影響を受けない日本の食生活はやや贅沢で奇異に見えた。しかし、こうした食肉の利便性がある一方で、ほとんどの日本人は、家畜を屠る場面を見る機会がない。多くの人々にとって経験的にたどれる肉の起源は、冷蔵庫あるいはスーパーマーケットまでであろう。たとえ食肉センターの存在を知っていたとしても、自分には

遠い存在、ときには閉鎖的で暗く怖いイメージしか持っていないのではないか。そこで働く食肉解体作業員に対する偏見や差別も存在する。このように日本では、屠る現場が不可視な存在にされ、屠るといふ実践が日常生活から除外されており、その結果、命と肉のつながりは分断されているのである。^{*}家畜を屠るあるいは殺す現場を描き、殺しといふ実践そのものに対する理解を国民一般に呼びかけたことに、絵本『いのちをいただく』の社会的意義がある。

むろん、屠畜を取り上げた書物は、絵本『いのちをいただく』だけではない。イラスト・ルポルタージュ『世界屠畜紀行』は、日本で初めて正面から屠畜の実態を取り上げた書物として広く知られている。世界各地の屠場で取材してきた著者の内澤によると、世界的に見て、屠畜者が差別されるのは、日本・韓国・インド・ネパールくらいである。ほとんどの国においては、たとえ屠られる家畜がかわいそうだと思ふことがあっても、屠畜者を差別することはない。逆に、モンゴルやエジプトのように、屠畜できる人が周囲から尊敬されたり、屠畜業を神様がくれた仕事だと誇りに思ったりする国があるという（内澤二〇〇七）。このように屠るといふ行為に対する人間の態度は、社会や文化によって大きく異なるということが分かる。もし『世界屠畜紀行』が世界の屠畜事情に関する日本初のルポルタージュだとすれば、本書『動物殺しの民族誌』は、世界の動物殺しを主題化した日本初の学術書になるだろう。

本書は、家畜のみならず、野生動物を殺す行為も扱う。また、食べるための狩猟・漁撈・屠畜はもとより、神に捧げるための供犠も射程に収めており、これらの行為すべてを本書では「動物殺し」という用語で表す。人類学ではこれまで、動物殺しが扱われてこなかったというわけではない。例えば、文化人類学領域における供犠研究や生態人類学領域における狩猟研究では、膨大な研究成果が蓄積されてきている（タイラー 一九六二、スミス 一九四一—一九四三、フレイザー 二〇〇三、デュルケーム 二〇一四、モース／ユベール 一九九〇、ラドクリフ・ブラウン 一九七五、エヴァンズ・プリチャード 一九九五、レヴィ・ストロース 一九七〇、ド・ウーシュ 一九九八、田中 一九七一、煎本 一九九六）。

しかし、これまでの傾向を見ると、供犠という枠組みで区切られる動物殺しはしばしば表象研究に、狩猟という枠

組みで区切られる動物殺しは往々にして生業あるいは経済研究に、それぞれ回収されてしまうくらいがある。その点を踏まえて、供犠や狩猟という用語の有用性を認めながら、動物殺しという実践そのものに焦点を当て、当該実践と人々の生活世界がどのような関わりを持ってきたかを考察するのが本書の目的である。方法としては、執筆者たちはそれぞれの調査地で得られたデータをもとに、動物殺しの実践者たちの経験を前面に押し出すことで、上記目的を達成しようとしている。それゆえ、本書は、動物殺しの民族誌なのである。なお、全体として民族誌的な記述が目指されるが、個別テーマによっては、歴史あるいは文献学的なアプローチが取られる。

本書の各章の対象地域は、アジア、アフリカ、ヨーロッパ、南北アメリカである。これらの地域において人々は動物を殺し、タンパク源としてその肉を摂食しながら暮らしている。同時に、そのおかれて自然環境、信仰する宗教の違いによって、動物の殺しの在り方が異なる。この事実自体は、当然といえるもので、取り立てて問題であるわけではない。「問題」となるのは、特定の動物殺しの在り方をめぐる価値評価が人間同士のさまざまな軋轢を引き起こす時であろう。では、こうした問題はどのような「政治」的状況の下で生じているのか。そして、そもそも、特定の動物殺しの方法を規定している「論理」とはどのようなものなのか。さらに、ある特定の動物殺しの在り方が、外部との相互作用の中で、どのような変貌を遂げてきたのかという「系譜」があるのか。この三つの問いを我々研究チームは共有した。そして、この三つの問いにそれぞれ対応しているのが、本書の三つの部である。

動物殺しの「問題」としての側面を考えるのが「動物殺しの政治学」と題する第Ⅰ部である。第Ⅰ部の三つの章はそれぞれ動物殺しと人殺しを論じている。動物殺しは人間と動物の関係において、人殺しは人間と人間の関係において理解されるべきであり、両者の間には必然的な関連性はないと思われるがちである。しかし、現実社会においては、両者はしばしば密接に関係しあい、多くの場合は政治的な課題としてクローズアップされる。

第一章では、フランスを中心に現代ヨーロッパにおける「儀礼的屠殺」をめぐる問題が論じられる。ユダヤ教徒やイスラーム教徒は宗教的戒律に基づき、気絶処理を行わない屠殺方法を採用しており、この方法は儀礼的屠殺として

位置づけられている。ヨーロッパ諸国では、動物保護思想の広まりにより、動物に苦痛を感じさせないための配慮として、気絶処理を行う義務が法制化されてきたものの、儀礼的屠殺は特例としておおよそ認められてきた。ところが、二〇世紀末、イスラーム系移民増加の問題が浮上すると、儀礼的屠殺はフランスの普遍的なるものに馴染まない野蛮な慣習として有徴化され、その残虐さへの批判がクセノフォビア（外国人嫌悪）と結びつき、他者排斥運動として展開されるようになった。花測馨也は、屠畜という行為が日常から隠蔽されるとともに残酷なイメージが与えられるようになった感性の歴史や、ナチスドイツがユダヤ人の屠殺方法を残酷で非人道的なものとして攻撃するプロパガンダによっていかにホロコーストを正当化したかという事実にも言及しつつ、今日のヨーロッパにおける動物殺しと移民排斥をめぐる文化政治学について論じている。どのような状況において特定の動物殺しの仕方が問題化されるかだけでなく、いかにそれが政治的暴力と結びつきうるのかを考えさせる論考である。

第二章では、現代社会の倫理道徳からすると決してその存在が許されない、子殺しや棄老といった人殺しの問題を取り上げている。具体的には、南米パラグアイの熱帯森林に生きる狩猟民のアチエ（グアヤキ・インディオ）社会について、フランスの民族学者ピエール・クラストルが一九六〇年代に著した民族誌を再読しながら、当時のアチエ社会においてある意味で黙認されたこれらの人殺しの特徴を解析する。池田光穂は、人々がある対象を殺す際に、その対象をそれまで所属していた範疇から排除し、自分たちとは異なる存在として他者化することで「殺す」ことが可能になるという点に着目する。その上で、そうした実践が、屠畜の際に、犠牲になる家畜に呪文を唱えたり、聖水や花びらをかけたりして聖別する行為に似ていると分析考察する。関連する民族誌の地道な再読作業を通じて、池田は、人殺しと同格とされる「動物殺し」に関する質的理解を深めようとしている。

第三章の舞台はアフリカに移る。にわかには信じがたいが、南部エチオピアのボラナという牧畜社会においては、家畜を供犠すること、野生動物を仕留めること、嬰兒を遺棄すること、敵対集団の人間を殺すことなど、形を変えながら多種多様な「殺害行為」が行われている。それらの目的は、たった一つである。すなわち、男性性の獲得である。

そこでは、動物殺し（植物殺しも含む）と人殺しは最初から密接に関連しあっており、一種の文化現象を成している。ボラナにおいて、男性は、何ものかを殺害しながらライフステージを移行し、男性性を獲得することを期待される。ここでいう男性性とは「男であること」と「父親であること」を意味するが、前者は個人として狩猟と戦いで勇敢さを示すことによって、後者は世代組の年長者による嬰兒遺棄と供儀を伴って獲得されている。ボラナ社会では、動物殺しと人殺しはもはや別個のものとして論じることが困難である。田川玄は、現地調査の経験を活かしボラナの供儀、狩猟、嬰兒遺棄、戦いを民族誌的に描き、男性性の獲得をめぐる、それらの諸要素がどのように関係しあっているかを明らかにする。

人殺しは、他者を排除あるいは支配するための究極の行為であり、そこには権力が欠かせない要素として作動しているという意味で、政治的なものである。そのような人殺しと隣りあう動物殺しが人々の関心と呼び、問題視されているのも、政治的だからである。いわば動物殺しに見られる政治学の構造をつかみとるのが第Ⅰ部であった。

特定の動物殺しの方法を規定する論理とはどのようなもののかを、よりミクロな社会文脈の中で考えていくのが「動物殺しの論理学」と題する第Ⅱ部である。第四章は、北米カナダ先住民のカスカ社会におけるユニークな狩猟実践を取り上げ、彼らの動物観を抽出する。カスカ人たちは、狩猟でヘラジカなど草食動物を殺した時は、「気管を木の枝にかける」「舌の先をブッシュに置いておく」といった儀礼を行う。しかし、テンなど肉食動物を殺した時には儀礼を行わない。なぜ、一部の動物に対しては儀礼を行うのか。ここでは、儀礼は贖罪のため、あるいは殺された動物の復讐を回避するためといった仮説は通用しない。カスカにとってテンなどは市場でその毛皮を販売するために殺すが、ヘラジカなどはその肉を自家消費するために殺す。そして、人間がヘラジカを一方的に殺しているように見える行為は、カスカにとって、ヘラジカが贈り物として差し出してくれた自らの肉を、人間はいただいている、ということになる。そこで、感謝の気持ちを表しヘラジカの魂を再生させるために、人間は返礼として儀礼を行うのである。山口未花子は、これらの儀礼から、人間と分断された全く異質の存在としてではなく、互いに交流可能な連続し

た存在として捉える彼らの動物観を描き出している。

第五章で取り上げられるのは、中米パナマ共和国東部に暮らす先住民エンベラによる獲物と毒蛇の殺しである。食肉という目的から獲物としてシカなどを殺すのは理解できる。しかし毒蛇は、その肉が利用されることはない。また実際襲われることがなくても、毒蛇というだけで容赦なく殺される。近藤宏は、狩猟活動以外に見られる動物殺しの実践を組上に載せることによって、その実践を支えるエンベラ社会の論理の特徴、すなわち、人間と非人間との関係の本質をめぐるエンベラ人の観念を説明しようとする。エンベラにとって、人間と非人間は魂を持っている点では共通しているが、異なっているのは身体である。非人間的な存在の中には動物以外、ハイという霊的な存在もいる。ハイが人間の身体につきまとうと病気になる。症状はハイの姿となる。毒蛇の危険はその牙、つまり特異な身体に由来する。ハイと毒蛇の身体はそれぞれの仕方で危険を体現している。そして物理的に破壊できる身体を持つ毒蛇は、容赦ない殺しの対象となる。こうした動物殺しの論理からエンベラにおける人間と動物は必ずしも二元化された存在ではないということが読み取れる。

第六章では、マレーシアのボルネオ島の熱帯雨林に住む狩猟民プナンによる狩猟を取り上げている。具体的には、プナンが、森の生態と関わりながら、狩猟活動をいかに組織しているのが記述検討されている。プナンは、吹矢、槍、銃などのような、獲物の死んでいく姿を人間が直接目にするのではない道具を用いて、あらゆる野生動物を躊躇うことなく死に至らしめる。野生動物は発見され次第、殺しの対象となる。彼らは、ヒゲイノシシやその他の野生動物を手に入れるために、植生の変化につねに気を配っている。季節性のないボルネオ島では、ある時いつせいに花が咲き、それに続いていつせいに実が成る。プナンにとって、季節変化を印づけるのが、鳥の鳴き声である。鳥は、人間だけでなく、あらゆる生きものに実りを告げて回る。人間は、果樹を見つけて、あるいは、落下している果実を見つけて、そこに動物がやってくるのを待ち、動物を仕留める。猪肉は、果物とともにプナンの食卓を豊かなものにする。奥野克巳によると、彼らの動物殺しの特徴を決定づけるのは、神話や鳥占いなど象徴記号による抽象的な思弁ではなく、

互いに指標記号となる森・鳥・果物・猪・人間などの諸存在の具体的な絡まりあいである、という。

このように、詳細を検討していくと、同じ狩猟とはいえ、これまで取り上げた、カスカ、エンペラ、プナンにおける野生動物の殺し方やそれが依拠する論理の在り方はかなり異なっていることが分かる。しかし、共通して言えるのは、いずれの狩猟実践においても、実践者たちは、人間と人間以外の諸存在を互いに交流不可能な完全異質のものとして捉えていない、ということである。そういう意味で、毒蛇を見たら殺さずにはいられないエンペラの態度、野生動物全般に対して殺意を抱くプナンの振る舞いなどは、動物愛護思想が広まる現代都市社会ではあまり理解されないばかりではなく、ことによると「野蛮な慣習」としてバッシングの対象となるだろう。

それでは、「野蛮な慣習」のように思われる動物殺しの在り方が、それらを取り巻く資源開発や自然保護といったイデオロギーとの折衝の中で、今現在、どのような変貌を遂げようとしているかを考察するのが、「動物殺しの系譜学」と題する第Ⅲ部である。

「野蛮な慣習」という意味では、おそらく、合理的思考が身に染みついた現代人にとって、供犠は最も理解しがたい行為の一つであろう。『大辞林』によると、供犠とは「宗教などで、特定の宗教的目的と共同体の結束のために、いけにえ・犠牲を神に捧げること」である。供物や犠牲になるのは動物に限らないが、動物殺しにとって供犠は重要な一つの形態である。人類史上、動物殺しはしばしば宗教的儀礼の枠内において「供犠」として行われてきた。第七章では、供犠実践や供犠実践をめぐる研究の系譜を取り上げる。具体的には、狩猟民・牧畜民社会から、地中海世界やイスラーム圏、さらに東南アジアや東アジアにおける供犠の展開過程とそれらをめぐる研究の特徴が記述分析される。そのうえで、供犠はキリスト教を背景に持つており今や支持しえない過去のカテゴリーであるという、近年関連研究領域に見られる批判がいかにも的外れであるかが論じられる。山田仁史は、一九世紀末から今日まで蓄積されてきた古今東西の民族誌的情報を活用しながら、現代社会において、動物殺しの現場が一般人の目から隠され、供犠そのものも動物愛護の立場から厳しい批判を受けている一方で、供犠という名で呼ばれてきた諸実践が現代社会でも広く

行われており、供犠という概念は今後も有用な学術用語として生かされるに違いないと展望する。

第八章では、アメリカ合衆国アラスカ州内陸部に暮らす先住民ディチナニク人社会を事例に、「文化キャンプ」と呼ばれる狩猟や漁撈といった伝統的な生業を再活性化する取り組みに焦点を当て、その位置づけを人々のおかれている文化や経済的な文脈において考える。こうした取り組みは、先住民アイデンティティの構築・発揚と深く結びついているだけでなく、自給自足的な狩猟採集生活への回帰にまつわる予言的語り、過去回帰言説がその背景にある。事実、白人との接触以降、先住民社会では、生存経済と現金経済が混じり合ったいわゆる「混合経済」が生じている。過去回帰言説が予言するのは、まさしくこの混合経済体制の崩壊である。しかし、実際その細部に入ってみると、「文化キャンプ」は、神話の身体的な記憶が継承される場であるだけではなく、混合経済への彼らなりの適応の結果でもあるということが分かる。近藤祉秋は、「文化キャンプ」を、「動物殺し」をなりわいとしてきた人々が強大な国家に包摂される過程において大きな変化を経験する際に、集団としての自律性を保とうとする試みの一つであると位置づける。集団意識と経済活動のいずれにおいても、「動物殺し」は人々にとって重要であり続けるだろう。

第九章では、中国西部青海省に暮らす牧民オイラト人の屠畜方法について考察している。牧民にとって家畜を屠るという行為の目的は一般にその肉を食べることにある。よって、屠畜は、その屠畜方法が家畜に優しいか否か、得られた肉が美味しいか否かを考えることに結びついている。人びとは、窒息させてから家畜を屠る。この窒息法で、羊が気絶するまで一〇分、牛は三〇分もの時間がかかる。この方法は「窒息」を特徴とするため外部から残酷だと批判される傾向にある。だが、牧民たちは窒息こそ家畜に優しく、肉も美味しいという。地域の屠場がすべてイスラーム式だったため、その肉は美味しくないということで、これまで一度も市場で肉を買ったことのない者もいる。彼らは美味しく食べたいがゆえ、屠畜する際には窒息法を採用する。美味しさと優しさは因果関係を成す。ただ仮に、美味しさだけを追求するのであれば、原理的に他の屠畜方法を採用してもよいが、人々はやはり優しい窒息法に拘る。近年、牧民たちが資金を出し合い、窒息法に拘って屠場を開設したが、その屠場の肉の味が人気を博している。優

しさと美味しさは因果関係を成す。シンジルトは、恣意的に見える特定の屠畜方法が、当事者にとっては必然的であり、それは優しさと美味しさが常に相互規定関係にあるからだ、と考察する。

第Ⅲ部で取り上げた供犠、狩猟（漁撈）、屠畜は、動物殺しを支える三つのキーワードである。過去のカテゴリとされる供犠は、今も形を変えながら諸地域で実践されている。学習の対象として客体化されているけれども、アラスカにおける狩猟（漁撈）実践は、先住民社会に新たな文化をもたらす可能性を秘めている。青海オイラト人社会における伝統的な屠畜は、窒息という形式を保ちながら、近代的な企業に受け継がれている。我々はこれらのフィールドにおいて、異なる性質の動物殺しの系譜を確認することができよう。

ところで、冒頭で紹介した、絵本『いのちをいただく』の主人公である元食肉解体作業員の坂本氏は、退職後、現在各地で講演活動を行い、それを通じて屠畜という仕事を多くの人に理解してもらおうとしている。彼の活動にメディアも好意的である。地元の熊本県民テレビは、二〇一六年春、坂本氏をはじめとする食肉センターのスタッフたちの仕事や生活を紹介する番組を制作した。番組の名前は『いのちを伝える——元食肉解体作業員の挑戦』であった（KKTくまもと県民テレビ二〇一六）。ゲストとして、筆者も番組に出演する機会があった。

坂本氏との番組の対談の中で、筆者は彼に、青海オイラト人たちの屠畜方法、窒息法を紹介し、その映像を観せた。日本の屠畜現場では、屠畜銃を使い家畜を失神させてから素早く屠ることが、家畜を楽にさせることになる、つまりその方法が家畜に優しいと考えられている。それとはまったく異なるやり方で行われている屠畜のシーンを観てもいい、それに対する坂本氏のリアルな感想を聞きたかった。そして、この映像を観たら坂本氏はきっと驚くだろうと、筆者は確信していた。しかし、驚いたことに、坂本氏のリアクションはいたって淡々としたものだった。彼は低い声で、屠畜するオイラト人の屠る技を褒めた。屠られる羊は、苦しそうな表情を見せたり、抵抗したりすることがなかったからという。屠られる家畜の視線から屠る方法を評価するという発想は、筆者にとって新鮮だった。窒息法のシーンを観て相手に驚きを期待する筆者より、坂本氏の方が窒息法の真の理解者であるかもしれない。第Ⅱ部の民族誌

が明らかにしたのと同じように、彼は屠畜の実践を通じて家畜との間に交流可能性を体得していたからである。

とはいうものの、坂本氏に悩みがないわけではない。屠畜の仕事に対する人びとの無理解である。そのため、彼は講演活動を続けている。現代日本社会において多くの人は、屠畜の仕事を理解しないばかりか、屠畜あるいは動物殺しといった言葉を口にすると、なぜか、それらをおぞましいもののように感じる。さらに、多くの人は、自らが持つこの種のネガティブな感覚を、世界共通のもので、人間が生得的に持つ本能によるものだと思い込んでいる。しかし、おぞましく感じることは是非はともあれ、動物殺しをめぐる特定の感覚自体は決して人間の本能によるものではない。このことを読者に伝えるのが本書である。動物殺しという実践にまつわる人間社会の多種多様な論理の在り方を記述考察する本書を読むことで、読者は、自ら慣れ親しんできたものとは全く異なる世界を追体験し、そこにみられる多様な生命観、環境観の存在に気づき、自己と他者、死と生をめぐる思考を深めることができるであろう。

注

*1 例えば、沖繩における人間と豚の関係を論じる中で、文化人類学者の比嘉は、豚を屠る方法の変化に注目しながら、産業化に伴って現代の屠場における屠畜実践がいかに不可視なものになり、人間と豚の間の距離がどのように広がり、生き物としての豚はいかにモノとして扱われるようになったかを明らかにしている（比嘉二〇一五）。

参考文献

- 煎本孝 一九九六『文化の自然誌』東京大学出版会。
内澤旬子 二〇〇七『世界屠畜紀行』解放出版社。
内田美智子（著）、諸江和美（イラスト）、佐藤剛史（監修）二〇〇九『いのちをいただく』西日本新聞社。
内田美智子（著）、坂本義喜（企画・原案）、魚戸おさむ（イラスト）二〇一〇『紙しばい いのちをいただく』西日本新聞社。
内田美智子（文）、魚戸おさむとゆかいななまたち（絵）二〇一三『デジタル紙芝居「いのちをいただく」』DVD、株式会社アー

スドラゴン。

エヴァンズ・ブリチャード、E・E 一九九五『ヌー族の宗教』(上下)、向井元子訳、平凡社。

KKTKくまもと県民テレビ 二〇一六『現場発! いのちを伝える——元食肉解体作業員の挑戦』二〇一六年四月三〇日、午後三時放送。

坂本義喜(原案)、内田美智子(作)、魚戸おさむとゆかいななまたち(絵) 二〇一三『絵本 いのちをいただく——みいちゃん

がお肉になる日』講談社。

スミス、W・R 一九四一〜四三『セム族の宗教』(前後)、永橋卓介訳、岩波書店。

タイラー、E・B 一九六二『原始文化』比屋根安定訳、誠信書房。

田中二郎 一九七一『ブッシュマン——生態人類学的研究』思索社。

デュルケーム、E 二〇一四『宗教生活の基本形態——オーストラリアにおけるトーテム体系』(上下)、山崎亮訳、筑摩書房。

ド・ウーシュ、L 一九九八『アフリカの供儀』浜本満・浜本まり子訳、みすず書房。

比嘉理麻 二〇一五『沖縄の人とブタ——産業社会における人と動物の民族誌』京都大学学術出版会。

フレイザー、J・G 二〇〇三『初版 金枝篇』(上下)、吉川信訳、筑摩書房。

モリス、M/H・ユベール 一九九〇『供儀』小関藤一郎訳、法政大学出版局。

ラドクリフ・ブラウン、A・R 一九七五『未開社会における構造と機能』青柳まちこ訳、新泉社。

レヴィ・ストロース、C 一九七〇『今日のトーテムイズム』仲沢紀雄訳、みすず書房。



An Ethnography on Killing Animals

シンジルト
奥野 克巳 編

動物殺しの民族誌

An Ethnography on Killing Animals
動物殺しの民族誌
奥野 克巳 編

昭和堂

graphy
imals



9784812216026

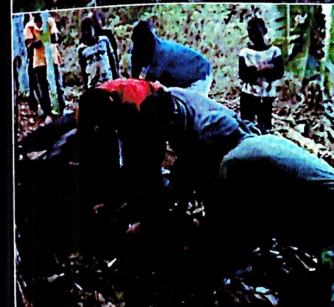
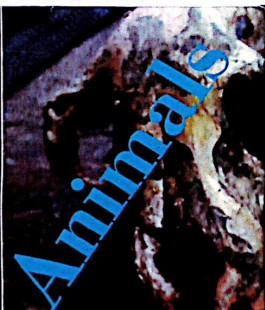


1923039058004

ISBN978-4-8122-1602-6
C3039 ¥5800E

定価：(本体5,800円+税)

030258



An Ethnography on Killing

下

堂